

旧書上商店



書上文左衛門(11代)
(1864~1914)

書上文左衛門(11代) (かきあげぶんざえもん)

十一代・書上文左衛門は、元治元年(1864)に現在の埼玉県羽生市に生まれました。地元の学校を卒業して上京し、漢学やフランス語などの塾でさらに勉強しました。その後、横浜のレンガ会社に就職しましたが、才能が認められ間もなく副支配人に登用されました。そして、明治23年(1890)に27歳で書上家に婿養子として迎えられ、二年後に同家の家督(その家の主人が持つすべての権利)を相続して父左衛門を名乗ることになりました。

店主となった父左衛門は、有能な人材を入店させたり、これまでの縦書きの「大福被」(帳簿)を横書きの新しい洋式帳簿に改めたりしました。店の「決まり」(店則)も新しい形に改正しました。さらに、桐生の本店のほかに、足利や伊勢崎・館林・佐野など両毛(群馬・栃木・埼玉)地方の主な織物産地に出張店(支店)を進出させました。また、明治30年(1897)には横浜に書上輸出店を建設し、羽二重などを海外に輸出するとともに、明治40年(1907)には上海に「書上洋行」という貿易会社を設立し、織物販売のほか中国産の有望な商品の輸入も行いました。

当時、書上商店には店員が百人以上いて、一年間の取引高は700万円(今の約1億5000万円)を超えたといわれています。また、「書上タイムス」という月刊雑誌を発行して織物関係の情報を発信しました。

旧 書上商店(きゅう かきあげしょうてん) (花のにしはら)

建築年: 店舗・明治前期

書上家は、買継商人としてこの地に店を構え、江戸・京都に販路を拡大していきました。明治期には、近隣の足利・佐野をはじめ伊勢崎・館林にも出張所を新設し、一躍、両毛織物買継商の第一を占めるようになり、明治29年(1896)横浜支店、明治39年(1906)には上海にまで支店を開設し、「桐生織物」の販路拡大を図りました。

昭和28年頃から昭和30年にかけて、作家坂口安吾が書上家の一角を借り、作家活動を行い、この地で生涯を終えています。

昭和36年(1961)頃、初代当主が花屋を開業し、現在に至ります。

